東方瑠璃光薬師浄土についての一考察

――文化論的アプローチから――

杉山二郎

一　はじめに

原始仏教において始祖ゴータマ・シッダールタは実践哲学的思索の上に立って、当時のヒンドゥー社会の機構に潜む矛盾と不合理性を指弾した。彼の八十歳の生涯の行動軌跡には、人間性の苦悩悦楽、喜怒哀楽の根源の種々相に対する深い省察と合理的思惟の結晶が美果として輝いている。「阿含の仏教」の教理を逐一辿れば実践哲学の様相を窺うことができよう。

しかし、彼の死後部派仏教分裂から、やがてシルクロードの中央点に進出した教団は、非インド的な思惟、思想をもった人たちとの接触、また異教徒との論争から妥協の諸刺戟を受けて、大乗部派の成立と展開にいたる。この問題については、すでに宮本正尊博士編「大乗仏教の成立史的研究」(昭和三十一年九月　三省堂刊)また静谷正雄氏の「初期大乗仏教の成立過程」(昭和四九年七月初版　平成二年三月三刷　百華苑刊　本引用は三刷版によっている)に詳説されている。

わたくしは、かつて阿弥陀如来を教主とする西方極楽浄土の成立について、西アジアのオアシス都市に見る「楽(パラ)

園（ダイス）」の観念と、その具体的遺構の一つ「タ―ク・イ・ブスターン洞」を調査して「極楽浄土の起源―祖型としてのタ―ク・イ・ブスターン洞」（一九八四年七月 筑摩書房刊）に纏めたことがあった。そして極楽思想に対置する地獄思想から仏教における地獄思想の成立展開の様相を、砂漠の苛酷な自然環境への放逐とその苦痛、また法制史、刑罰史の道具立てから考察しようと企図したこともありはした。今遽に本大学の紀要に一文を求められて、この問題を採上げてみようかと思ったのだけれど、西方極楽浄土に対して方位として東に位する東方瑠璃光薬師浄土について、かねてからインド南方から東南アジアに分布する香料・薬料の産地に着目研究してもいたので、薬師如来を教主とする瑠璃光薬師浄土を、これら香料群島をイマージュすることによって経典成立の一因と見做してみたいと思い、ここに仏教文化学の一テーマとして論及してみようと筆を執ったのである。

「極楽浄土の起源」で西アジア起源説を紹介したのだったが、静谷正雄氏の「初期大乗仏教の成立過程」の論著を参酌する機会がなくて、その第五章原始大乗の成立、第二節阿弥陀仏と阿閦仏の出現の部分を嗜読するに及んで多くの教唆を蒙ったので、先ずその一部を紹介したい。

「十方の世界には無量の諸仏が現在するという思想は、大乗仏教の基本思想である。後代の文献ではあるが、『瑜伽師地論』では現在多仏出現の理由を述べて、十方における無数無量の菩薩たちが同時に誓願を起し、同時に悟りの資格を達成しているのだから、十方の多世界に多仏が同時に出現するのは、当然の道理である、という。（中略）現在他方仏として最も古いと認められている東方妙喜世界の阿閦仏や西方極楽世界の阿弥陀仏が、どうして登場してきたかを歴史的に説明することはできない。この二仏はともに善快清浄なる仏国土を建設し、その国に生れる者は、常にその仏のそばにあって見仏聞法をなし得るから、修行が進み、悟りを得るのが速い、とされる。では、このような現在他方仏が登場するのはなぜであろうか。（中略）

初めは、仏塔信仰や聖地巡礼によって宗教的要求を満たしえた人々も、今やそれでは満足できなくなった。そこで、親しく見仏聞法できる現在仏が求められる。ただ娑婆世界は釈尊の国土であるから、現在仏出現の世界は、他方に置かれる。（中略）阿弥陀仏や阿閦仏はこのような情況の下に登場するのである。」（前掲書二四六～二四七頁）

そして更に

「阿弥陀仏と、その極楽浄土の思想は、後漢支婁迦讖訳（西紀一七九）の『般舟三昧経』に出てくるので、訳経史の上から言えば、その成立の古さは、阿閦仏信仰と変わらない。ただ弥陀信仰を主題とする『大阿弥陀経』が、呉の支謙訳（二二三～二二八）で、その点『阿閦仏国経』より半世紀、訳出が遅れる。しかし『大阿弥陀経』を検討すると、阿閦信仰より弥陀信仰が遅れて成立したとはいえない。（中略）

藤田宏達博士は、阿弥陀仏の登場する仏典の漢訳者が、ほとんど西北インドか、中央アジアの出身であること、『大阿弥陀経』の極楽の音写「須摩提」などが、ガンダーラ語形の音写とみられていること、黄金や宝石などによる極楽世界の華麗な描写が、クシャーナ王朝治下の東西貿易による商業社会層の繁栄を示すものであること、極楽浄土の平等性は四姓制度を重視しないクシャーナ王朝との結びつきを反映したものであること、河や池などの水、さまざまの樹木、吹き渡る快い風、が浄土の極めて重要な素材になっているのは、暑熱のきびしい自然風土から生まれたことを示すこと、を挙げて、阿弥陀仏思想はクシャーナ王朝の領土内おそらくは西北インドにおいて、西紀一〇〇年ごろ成立したものであろう、と推定された。

この推定が許されると、弥陀信仰の成立をめぐって、イランなど西方の宗教思想の影響も考えられてくる。中国の巡礼僧が、インドにおける弥勒や観音の信仰について伝えるところはあっても、阿弥陀仏に関しては全く沈黙していることも、弥陀信仰がインド的土壌の産物ではないような印象を与える。阿弥陀仏に言及する碑銘もないし、観音宝冠の仏を除けば、阿弥陀仏と認定できる仏像の遺例もインドでは見つかっていない。しかし阿弥陀

仏の名はインド成立とみられる諸経典に出てくるし、龍樹と関連された伝承があり、世親に『浄土論』の著作があり、『究竟一乗宝性論』などにも弥陀信仰が現れる。少し岐路に入ったが、インドにおける弥陀信仰については不明の点が多い」（前掲書二四八～二四九頁）とされた。

氏はイランなどの西方の宗教思想の影響を云われたが、その具体的なゾロアスター経典のアフラマズダ神やアナーヒター女神について触れられていないが、西方起源説に触れて、「極楽浄土の起源に関しても、種々の説がある。ゾロアスター教の太陽神と結び付ける学者は、極楽が太陽の沈む西方に位置することを根拠に挙げる。西方が選ばれたことは、東方を第一とするインド的伝統とは異質であるという印象を与える。阿弥陀仏の光明がとくに勝れていることが強調され、おそらく最初からアミターバの名で呼ばれたであろうことを考えると、また、ペルシアの宗教思想が前一世紀から流入した西北インドで、紀元後一世紀末に弥陀信仰が生れた可能性の多いことを考慮に入れると、西方宗教思想を無視することはできないであろう。」（前掲書二五一頁）

静谷氏はこのなかで「東方を第一とするインド的伝統」を指摘されているが、このことは同じ著書のなかで第三章原始大乗の経典のうち第一節大阿弥陀経、二、大阿弥陀経と阿閦仏国経の成立の先後、のところで、「阿弥陀信仰の成立ということになると、年代的に見て、『阿閦仏国経』より必ずしも新しいとするわけにいかない。しかし『阿閦仏国経』に現われる阿閦仏の本願や浄土の観念が『大阿』に現われる阿弥陀仏のそれより未熟素朴であること、東方を重んずるインド的伝統から、まず東方出現の阿閦仏信仰が生まれたと考えられること等を理由として、一般には阿閦信仰を弥陀信仰よりも古く見る見方が行われてきたようである。」（前掲書、六〇頁）と指摘されている。東西南北の方位のうち東方を重視するインド人の思惟方法、価値感の根元にあるのは何故であろうか。足利惇氏先生は次の様に指摘されて居られる。

「ドラヴィダ族は、それ自身独自の民族史を有すべきことは可能であるが、ただ印度文化史研究に問題となるの

は、この種族の文化がアールヤ民族の印度侵入によって展開せられたる印度文化への影響と関係とである。ドラヴィダ語の現存の資料は僅かに西暦紀元五・六世紀以上に溯ることは出来ないが、彼らが今日の印度民族のうち、最も思想的に自由にして海外への往来が繁く根強き精神の持ち主であることは、古来より民族的に分散・植民・貿易を行って来たものであることを示し、かつ、彼らの東西海洋交通の中間的地置は、あたかも古代の地中海におけるフェニキア人の如く商業交易の独占に利便が多かったことを物語るのであって、かのアールヤ的なる内陸的印度に比してかかる海洋的印度が非アールヤ的民族の特質によって覗わるべきことを忘れてはならない。また古代インドにおいて、特にアールヤ民族侵入以前の北部印度における考古学的遺物が東方遙かポリネジアに到る一聯の関係を示していることは、それらがこの海洋的民族によって伝播せられたことを肯定せしめる」(『印度史概説』昭和二十九年八月、弘文堂刊、アテネ新書60、六頁)

東方を優位とする世界観の根底には、北方ヒマラヤの雪山を神々の居住する聖地と考えられたこと、現世を穢土として、彼岸の世界に浄土楽園を設定するに、一部の大乗部派の識者によって、阿閦仏の浄土東方妙喜国や、弥勒仏の兜率天浄土、また西方阿弥陀極楽浄土が考えられ、なかでも東西の阿閦仏と阿弥陀仏が見事に構築せられたと云って良かろう。

静谷氏は極楽浄土が西方の方位を得たことに関聯して、

「岩本裕博士は極楽の原語 Sukhavati (楽しみのある所) の名が、ユダヤ教の「エデンの園」のエデン (快楽) の訳語、ないしはその名にヒントを得たものであるとし、極楽は西方の、大砂漠の向うにあるオアシスを仏教的に昇華させたもの、と論じられた。(岩本裕『極楽と地獄』一一四―一一九頁)」と紹介して居られる。

この岩本裕博士の著作は正確に云うと「極楽と地獄　日本人の浄土思想」(一九六五年八月、三一書房刊　三一新書四九二) の一一四頁から一一九頁に詳述されている。「スカーヴァティという名がアラム語エデンの訳語に基

づくと考えることは、文献の上で明確な証拠をあげることができないという憾みはあるが、文化史的な背景を考えてみるときには、あながち荒唐無稽な考えでないことが知られよう。しかも、スカーヴァティとエデンの両者には共通な性格が見られることも見逃してはならないであろう。すなわち、両者ともに方位観の上に立っており、しかも沙漠のオアシスの象徴であると考えられるからである。とくに、エデンという語がアッシリア語（前六〇六年に滅んだアッシリア帝国の言語）で〝平原〟とか〝沙漠〟を意味するエディヌという語と同語源であることは注意すべきである。」（前掲書一一六頁）とし、結論として「こうして、西方における大沙漠の向うにあるオアシスは西方十万億土の向うにある極楽として宗教的に昇華したことが知られよう。もちろん、極楽の描写に見られる華麗な建造物の描写については、祇園精舎などの園林についての古い伝承やまた今日サンチーやバールハトの遺跡で見られる楼門、欄楯などがその原型になったことはいうまでもないことであろう。」（前掲書一一九頁）とされた。

これはわたくしの扱ったターク・イ・ブスターン洞が、ペルシア語で「楽園の穹窿（アーチ）」を意味して湧水園池のオアシス都市の理想的造形表現した遺構である点と、軌を一にした極楽浄土の解釈であった。

静谷氏は更に定方晟氏の西方起源説を詳細に渉って要約されて次の様に述べて居られる。

「最近、定方晟氏は、エジプトのアメンテ Amente ギリシアのエーリュシオン Elysion（*Ἠλύσιον*）が極楽浄土の観念を生んだのではないか、という新しい想定を提示された。［「西方浄土・アメンテ・エリュシオン」（宗教研究二〇九）五三～六九頁、同『須弥山と極楽』（講談社）一四二～一五〇頁）］」（前掲書二五四頁）さて、定方晟氏によれば、「須弥山（しゅみせん）と極楽、仏教の宇宙観」（昭和四十八年九月、講談社刊、講談社現代新書三三〇）の2―西方浄土の思想の起源　人は死してアメンテに生れる、の項に次の如く云っている。

「ところで、私はこの〝エデンの園〟極楽起源説に対して、エジプトの〝アメンテ〟の思想とギリシアの〝エー

リュシオン〃の思想が、〃極楽〃の思想に結びつかないかと考えている。／周知のように、エジプトには古くから、人は死してamnt（〃西方〃）に生まれるという思想があった。それは不死の国であり、幸せの土地、微風の吹く土地であった。（中略）ひとは死ぬと、オシリスとなってこの西方なる土地に甦るのである。末期ギリシアの歴史家プルタルコス（前六四―一二〇以後）は、amnt（〃西方〃）をamenthēsとして伝えている。この言葉はコプト語においては〃アメンテ〃（amnt）となって伝わっている。これは〃アメンテ〃の思想が、少くとも三世紀ごろまで続いていたことを示している。とすれば、西暦一・二世紀、オシリスの信仰は決して少なからざる影響力をもっていたことがわかる。」（前掲書一四二―一四三頁）と紹介している。このエジプト神話学中に出るアメントAmentは「アメントの名は〃西方の人〃を意味する形容詞形に過ぎないが、女神として造形表現されると彼女の手に鵞鳥の羽毛を執らせ、時には鷹と鵞鳥の羽毛を取らせることがある。この羽根はリビア人の普通の装飾物であるが、彼らの髪に着飾ったりして〃西方〃と云う言葉の表象でもあったし、アメント女神に自然に適合させられた。この女神はリビア地方の、下エジプトの西方に位する地方に起源をもっていた。

後世〃西方〃は亦死者の地と見做され、そして西方の女神は黄泉の国の女神となったのだ。砂漠の入口にある世界の門に、人は屢々、樹木の簇葉から半身を現わした女神によって死者が迎えられるのを見るし、死者にパンと水とを供給して黄泉の国で生活する様選択せる。若し死者がそこで飲食すると、彼は神の盟友となり、神々に扈従して再び現世に戻ることが決してない。こうして死者を迎える神は屢々アメントと呼ばれるが、一方、亦屢々ヌトnut、ハトゥールHathor、ネイトNeithi, ないしマットMaatにもなって、西方の女神に身柄を置き換えたりする。」（New Larousse Encyclopedia of Mythology, New E. 1968, Harulyn. Egyptian Mythology, p. 41.）と解説されている。しかし有名なヘロドトスの「歴史」（青木巌訳昭和十五年七月、生活社刊）巻二、巻三のエジプト関聯記事のなかの(35)～(64)のエジプト人の習俗―神祇祭礼、(77)～(98)のエジプト人の生活のなかにも、アメント女神

の名はない。しかし西方の死者黄泉の国ハデズ（Hades）について「ギリシア人の所謂『ハデズの館』と言ふ冥府に降りて往って」（前掲書二〇七頁）と云って、青木巌の訳文には「ハデズの館」について何らの注記がないが、George Rawlinson; The History of Herodotus, 4 vols, John Murray, Albemarle Street, London, 1880, vol, II, (122) の件の文章に注記(6)がある。「ハデスはエジプト人にはアメント Ament アメンティ Amenti と呼ばれていて、オシリスが死者の審判としてアメントを主宰する。プルタルコス（de Isid. § 29）アメントが「授受者」を意味していると考えている。それは西方の人たちによってエレブス（暗黒の所）の様に考えられているのに相当して、「エジプト人によりエメント Ement と呼ばれ、太陽の没する所の暗黒の地を指す」云々とある（前掲書一五九頁）。また J. Gwyn Griffiths; The Origins of Osiris and his Cult, Leiden, E. J. Brill, 1980 のなかでも、アメント女神について言及する所がないのである。他方ギリシアのエーリュシオンであるが、

「ギリシア神話の、地の涯のエーリュシオンの野も、ホメロスのオデュッセイア（四・五六一）に、この上なく暮し易い、暖かい、爽やかな西の微風ゼピュロスの吹く国として語られ、前一世紀のストラボーンも、この国が西にあって暖かく、ゼピュロスの清らかな空気とやさしい風のあることを書き記している。ギリシア神話にはこのほかに、マカローン、ネーソイ（至福者の島）やヘスペリデス（黄泉の娘たち）の園〃という観念があり、後者は西の方、太陽の没するところ、オーケアノス（極洋）の涯に位置し、黄金の実を結ぶ樹があり、ヘスペリデスが常に歌舞するとされる。」（静谷氏前掲書、二五四頁）とギリシア版西方浄土の地を説明している。高津春繁著「ギリシア・ローマ神話辞典」（一九六〇年二月岩波書店刊）のエーリュシオンの項を見ると、

「Elysion, *Ἠλύσιον* 拉ラテン Elysium 神々に愛された人々（英雄などが）死後そこで幸多い生活を営んだ野。ホメーロスではこれはハーデースの支配下にある冥界とは全く別に、西のはて、オーケアノスの流れ近くに位し、支配者はラダマンテュスである。しかしウェルギリウスなどローマの詩人ではエーリュシオンの野は冥界

に移されている。〝幸福の島〟もまたこれと似たもので、同一場所かも知れない」(前掲書七二頁)とある。同書はその支配者ラダマンテュスについて「Rhadamanthys, 'Ραδάμανθυς、ゼウスとエウローペーの子、(中略)正義の士として名高く、クレータ人の立法者となり、死後冥府の判官としてミーノース、アイアコスとともに亡者を裁いていると。しかし彼は死なずにエーリュシオンの野に行ったともいわれる。」(前掲書二九七頁)とあって、極楽浄土の教主よりも冥府の閻魔王のイマージュを彷彿とする。一方エーリュシアの野原について、ストラボンの「地理志」H. C. Hamilton, W. Falconer; The Geography of Strabo, 3 vols, London, 1854. vol. I Book III. Chap. ii, 13 p. 225. に次の如く綴っている。

「さて詩人は、イベリアの奥地まで同じ探検をして得た知識とその富と他の奢侈品について見聞して、この地が栄華の地域だと捏造しエーリュシウムの野と見做した。そこはプロテウスがメネラウスに伝えて、彼こそそこに赴くべきだとした所である。

〝これぞ遙かなる昔神々こそ
汝れをエーリシュムに遣わさんと欲し、そして大地こそ
広く連なりて、そこにラダマントス棲まう
黄金なす髪して、亦人類ども
安楽なる生活を悦しみ、雪は降らず
寒酷なる冬もなし、はた土砂降り雨もなし
併してゼフィルの風は海辺より常に和らぎ吹き
彼らが上に息吹きて平和の民を甦らす。

さて、空気の清浄さ、そしてゼフィルスの穏やかな微風はともにこの国を特長づけている。その気温の和潤さと

同じ様に、その位置は西方にあって、そしてその地は大地の果にある。吾らがすでに云いしが如く、そこはハデス神の棲む所と捏造された所でもある。ラダマンティスとハデスとその一組として、彼はその地がミノス島に近い所と定義付けている。」

この地はストラボンの記述に見るように、スペイン・イベリア半島の彼方にある理想郷として伝統的に画かれている。さらにギリシア神話のヘスペリスたちについても、高津氏は次の様に説明しておられる。

「Hesperis, Ἑσπερίς（複数 Hesperides, Ἑσπερίδες）〝夕べの娘〟の意。ヘーシオドスでは彼女らはニュクス（夜）の娘であるが、のちゼウスとテミスとの、ボルキュスとケートーとの、最後にアトラースの娘とされている。その数も三人（中略）四人（中略）あるいは七人とされている。彼女たちはヘーラーがゼウスと結婚した時に、ガイアから貰った黄金の林檎が植わっている園の番人で、竜のラードーンが彼女らを助けていた、園は古くは世界の西のはて、オーケアノスの流れの近くにあることになっていた。がのちアトラース山脈の近く、あるいはヒュペルボレイオス人の国の近くにあるとされていた。」（前掲書二三〇頁）

呉茂一先生の「ホメーロス・オデュッセイアー」の第4書五六三行から次の語句が見えている。

「世界の涯の極楽（エーリュシオン）の野へ、不死である神々たちは、
そなたを送り届けるであろう、そこに金髪のラーダマンテュスが
（治めるところで）、人間にとり生活のこの上もなく安楽な国とて、
雪もなく、冬の暴風雨（あらし）も烈しからず、大雨とてもかつて降らぬ
年がら年じゅう大洋河（オーケアノス）が、音高く吹く西風（ゼピュロス）のつよい息吹（いぶ）きを
送りこして、人間どもに、生気を取り戻させるという、
それもそなたがヘレネーを妃（きさき）としていい、ゼウスの婿君となる故だが。」（岩波文庫版、上巻一二八～一二九頁）と。

西涯の極楽（エリューシオン）として呉先生は注記し「世界の涯にありと想定された楽園境、クレーテー王ミーノースの兄弟とされたラダマンテュスの支配下にありといわれる」とされた。

この金髪のラダマンテュス Rhadamanthus は William Smith ; Dictionary of Greek and Roman Biography and Mythology, 3 vols vol. III. London, John Murray, 1849. に次の様に記している。

「(*Ραδάμανθος*) ゼウスとエウロパの息子、クレタのミノス王の兄弟（ホメーロス・イーリアス、第十四書、三二一～二）。呉先生の訳文に「また遠国にも名の聞えた、ポイニークスの娘［注にエウローペーのこととある）の折とて、一／その女はミーノースと、神にも類（たぐ）うラダマンテュスを産んでくれたが」とある］ないし、他の伝承によるとヘファイストスの息子とも云う。（パッサニアス、第八書532節）彼の兄弟を惶れ憚ってボエオティアのオカレイアに逃れて、そしてそこでアルクメネと結婚した。生涯を通じて彼の正義感の故に、彼の死後に冥界での裁判官の一人となって、そしてエリシウムに住居を定めた。」（前掲書、四六頁）やはり地獄の裁判官閻魔王のイマージュに近く、隠遁の地として、エーリュシオン（極楽）に居住したことが知られる。こうしてみると地中海世界とエジプト世界で西の涯に死者の赴く極楽のある点が明らかになり、極楽の西限はイベリア半島の西岸に及んでいることが分る。

さて静谷氏の定方晟氏論考の摘要を続けると、次の様な條りに逢着する。すなわち、

「アフガニスタンのカーピシー（現ベグラーム）からは、エジプト宗教思想とギリシア宗教思想の混合を示す神像が発見されており、アレクサンドリア製作とみられる輸入品（海路運ばれたらしい）も出土している。」（前掲書、二五四頁）由を報じている。この神像は青銅製一三・三センチのハルポクラテス像を指しているらしい。所謂秘密保持の役目を果すエジプトの少年神像で「オシリス伝説はイシスがオシリスから得た子供の遺児について触れ、魔術の手段で殺された神の遺骸から再生したと云う。どの様にしてオシリスがブトから程遠がらぬチェムミスと

云う浮島でホルスに未熟児を託したかを語っている。幼少期にその児は「ホルスの孤児」ハルパクラド Harpakhrad すなわちハルポクラテス Harpokrates と呼ばれた。

ハルポクラテスは幼児、裸で唯宝冠で飾られて表現される。彼の頭は剃られるが子供の側毛が残されてこめかみに垂れ下がっている。時として彼の母オシリスの膝上に坐って一方母は乳房で哺乳している。彼は幼児の様に栂指を吸っている格好をしているので、ギリシア人によって誤って解釈されて思慮分別の象徴と受取り、黙秘の神力をもつ若い男性神としての名声を得た」(前掲英語版「神話学新ラルース百科辞典」、前掲、二三頁）とある。エジプト神話とギリシア宗教思想の申し子として、ヘレニズム時代からローマ期に渉り広く地中海世界から中近東、そして北西インドに流布し信仰された神である。青銅製のこのハルポクラテスは、わたくしの寓目したのみでも約十躰に及び、その二躯は日本に現存している。一方、北西インドでは、アフガニスタンのベグラーム遺跡で、J・アッカン博士が発掘し、Rencontre de Trois Civilisations Inde-Grèce-Chine, Nouvelles recherches archéologiques à Begram(ancienne Kapici) 1939～1940 2 vols. Paris, 1954. fig. 322. 324. に公刊されている、カーブル博物館蔵であった一躯。他の一躯はパキスタンのタクシラ遺跡シルカップからJ・マーシャル卿によって発掘された青銅小像がそれである。前者は頭部に尖塔状の帽子をかぶり頭部をやや右に傾け束髪を右頬に垂らし、上半身裸形で左肩から下半身をキトンで覆い、右手を挙げて人差し指を突出しながら仕草をする。タクシラ出土の像も青銅製で、尖った帽子をかぶり、幼児の表情に捲毛が右脇から右肩に垂れ、両肩を露わすも全身キトンを着用し両足は裸で、左手は垂下して軽く握り右手は口許迄挙げて人差し指を立てて、秘密を洩らしてはならないといった仕草を見せている。ベグラーム像の踊る様な動態と対照的である。この像の発見場所について、J・マーシャル卿の克明な説明がこの像の宗教的な役割を暗示している様に思われるので、次に紹介しよう。その「タクシラ案内」の小冊子の『シルカップの家屋1Eから出土した小遺物』に（Sir John Marshall ; A Guide to Taxila,

Cambrige University Press, 1960, p. 76) の項目に。

「この家屋からの小遺物はタクシラで発掘された最も興味深いものに属している。内庭bの南西隅にある小部屋の床下で、エジプトの子供の神ハルポクラテスの青銅像があった。特長的なギリシア＝ローマ技巧のこの彫像は、アレクサンドリアから同じ様なものとして全てもたらされたものである。アレクサンドリアこそハルポクラテス信仰の主要な中心地であった。この像の下約二フィートには、丸い突起のある蓋でその口を覆つな小さな土器製の瓶が明るみに出てきた。そしてディオニソスないしシレヌスの銀製頭部、金製腕環、耳飾、胸飾、指環、小玉類、金製ロケット、銀製鼠の尾状物、蹄状の柄のあるスプーンを瓶内に蔵めてあった。上記の宝物は疑いもなく、パルティア時代の遺物と一緒に発見された多くの他の遺宝と同時代のものであり、略紀元六〇年頃のものと考えられる。その時にタクシラはクシャーナの進軍によって略奪されたのだから。」と、(Sir John Marshall ; A Guide to Taxila, Cambrige U. P. 1960, p. 76)

この報告からも分るように、この秘密保持を司る幼児姿のハルポクラテス像が、その下に埋蔵隠匿した遺宝類を守護する役目を以って置かれたことが分る。所謂アレクサンドリア辺りで造立されたハルポクラテス像がパキスタンのタクシラと云った国際都市や、アフガニスタンの同じくクシャーン王朝の夏の都でシルクロード交点の国際都市ベグラームの埋蔵遺物と伴出した事実から、定方氏は次の如く推測したとして静谷氏は紹介して云う。

「そこで空想をたくましくすると、二世紀頃、カーピシー（現ベグラム）にいたある仏教徒が、遠くから来た商人あるいは宗教家から〝アメンテ〟の思想を耳にし、興味をひかれて〝アメンテ経〟を作る。その中で、微風の吹き、宝樹の花さく浄福の国を描く。その描写に当っては、エジプトのアメンテよりは、ギリシアのエーリュシオンや〝至福者の島〟のほうが豊かな霊感を与える。基本的構想さえ示されれば、あとはインド的な空想力が次々に手近な材料で、浄土の荘厳をふやしていく。転輪聖王の王城の描写や、北クル州の描写は、最も身近な

イメージ提供源になったであろう。ヘレニズム世界では、仏教の中に新しい教をまぜこむことは、彼にとっては何でもない。折衷主義は当時の世界的風潮である。さて〝アメンテ経〟は訛って〝アミタ（amita）経〟となる。アミタはインド人信者のあいだでは〝無量〟の意味に解されるから、彼らは〝何が無量なのか〟と問う。そこで僧侶は〝清浄が無量なのである〟〝光明が無量なのである〟と説明する。清浄や寿命の概念は、アメンテやエーリュシオンからも出てくるであろうが、光明の概念はゾロアスター教などから得たものかもしれない。さて西方の名として〝無量の清浄（あるところ）〟〝無量の寿命（あるところ）〟〝無量の光明（あるところ）〟は、それぞれ仏の修飾語ともなって、〝無量清浄仏〟〝無量寿仏〟〝無量光仏〟の名が出てくる。一方、西方そのものは〝極楽〟あるいは〝浄土〟とよばれ、また続けて〝極楽浄土〟と呼ばれるようになる。それはまさにエーリュシオン等の〝浄福〟の概念に合致する。従来の極楽起源説では〝西方〟の観念の起源を説明することができないが、アメンテないしエーリュシオン起源説をとれば、解決できるのではないか。アメンテがアミタ Amita の語源となったという想定は否定されてもよいが、少なくともアメンテの概念（エーリュシオンや〝至福の島〟の概念とともに）が、アミダ思想の根源になったという想定は捨てがたいものである。アミダ思想の発展においては、浄土の観念が先行し、そこからアミダ仏の思想が二次的に発達したようである。藤田博士は最初からアミターユス、アミターバの語があったとし、阿弥陀仏の原語はこのいずれかであるとされるが、サンスクリットやチベット語文献に現れる形態を、初期漢訳文献に現れるそれと、古さの点で同日に論ずることはできない。

以上が定方氏の提言の要約であるが、極楽浄土を西方に置く観念の起源を説明するものとしては興味深い提言である。とくに西方に死後の楽園を求める概念が先行し、そこから、その楽園を司どる阿弥陀仏の思想が二次的に発達したという考え方は、ずいぶん思いきった新鮮な考え方である。」（前掲書二五四～二五六頁）

こうした紹介文を綴ってみると、わたくしが、イラン高原の西端ケルマンシャーというシルクロード沿いのオアシス都市の北西二kmの湧水泉池に構築された石窟を伴う楽園（パラダイス）、ブスターンが、造形上の図像学（イコノグラフィー）と、美術史家、E・パノフスキー氏の唱導するIconology（図像解釈学）によって解析すると、無量光明と無量寿命の聖地としてササン王朝の末期（六世紀前半）に造立されたものの、その思想観念は全く浄土三部経、就中観無量寿経に描かれた世界像を彷彿とするのを禁じ得ない。ガンジス河農耕帯の豊饒さと自然楽園だった環境風土からは、浄土三部経に説かれるような口腹の悦楽と充足は家常茶飯のことであって、よしんば人間寿命の限界と苦諦の認識から彼岸への解脱を冀求したとしても、インド人固有の観念から生れたとするより、乾燥沙漠や風濤に翻弄せられて往来した隊商人や船員たちの安息地のイマージュから、創られた理想楽土と考えた方がより妥当性をもっている。

さて東方瑠璃光薬師浄土の経典成立の問題に眼を転じてみたい。が東方出現の阿閦仏に触れる必要がある。静谷正雄氏のそれについての論考を紹介しよう。

「阿閦信仰は一般に弥陀信仰よりも、少し古い成立とされている。その理由として、阿閦仏の本願や浄土が、阿弥陀仏のそれよりも未熟素朴であること、東方を重んずるインド的伝統から、まず東方出現の阿閦仏が生まれたと考えられること、などが挙げられ、その成立年代について、古く見る人は西暦前後とし、遅く見る人でも一世紀末までと考えている。

阿閦信仰が、どの地域で成立したかは不明であるが、初めて〝大乗〟を名乗った『小品般若経』と関係の深いことが、『阿閦仏国経』の語句や内容から窺われ、その親密さは、両経の作者が同一の系統に属したのではないかと想定せざるを得ないほどである（本書四六頁）。そして阿閦信仰は『小品般若経』に再三、顔を出し、『小品般若』の直系的展開と見られる『首楞厳三昧経』や『維摩経』にも登場する。しかもこれらの大乗経典では、阿弥

陀仏は出てこない。したがって阿閦信仰は、弥陀信仰と唱導者の系譜や成立地を異にしたものと考えられる。もしそうであれば、その本願や浄土の観念が、未熟素朴であるからといって、直ちに弥陀信仰よりも古い、と決めることは少し早計であろう。ほぼ同時代の成立ということで落ち着けざるを得まい。

現在他方仏と、その仏国への往生が説かれると、それは凡夫の菩薩たちを勇気づけたに違いない。龍樹の『十住毘婆沙論』巻四の易行品は、菩薩が速かに不退転の位を得る信方便として、『宝月童子所問経』の十方十仏をはじめ、阿弥陀仏等の諸仏や善意等の諸大菩薩を憶念・称名、恭敬礼拝すべきことを述べている。『宝月童子所問経』は内容的にみて、〝原始大乗〟期のものではないが、十方に十仏を立てて、その仏名を称して礼拝を行うことが、すでに〝原始大乗〟期に存在したかも知れない。別の十方十仏を挙げる『滅十方冥経』（竺法護訳）や、六方六仏を挙げる『宝網経』（同上）も〝原始大乗〟期のものではないが、十方十仏や六方六仏を立てる思想は、〝原始大乗〟からの継承であろう。『大阿弥陀経』も、十四の他方仏国を挙げるが、『マハーヴァスッ』の他方現在仏や漢訳『増一阿含経』の東方奇光如来を含めて、これらのさまざまな現在他方仏の成立の先後を探ることは、極めて困難である。われわれは〝原始大乗〟の段階において、阿弥陀仏と阿閦仏がほぼ同時に、しかし唱導者の系譜を異にして登場したことを知るだけで、満足しなければならない。」（『初期大乗仏教の成立過程』第五章、原始大乗の成立、二五六～二五七頁）

静谷氏の所説を念頭に置いて改めて望月仏教大辞典の巻一、アシクブツの項目を追ってみる。

「阿閦仏 akṣobhya-buddha（仏名）梵名。西蔵名 sans-rgyas mi-ḥkhrugs-pa, 又阿閦、阿閦鞞、阿閦婆、阿芻鞞耶、嗢乞芻毘也に作る。不動、無動、或は無怒、無瞋恚と譯す。吉蔵の維摩経略疏第五に〝閦の字は此の土に無き所。翻経者、義をもて此の字を作る耳〟と云へり。東方現在仏の名、阿閦仏国経巻上に依るに、過去に東方此を去る千仏刹にして、阿比羅提と名づくる世界あり。大日如來其中に出現して、諸の菩薩の為に六度無極の行

を説く。時に一比丘あり、大目如来に白して曰く、我れ當に菩薩の所行を学ぶ所あらんと。如来比丘に告げて曰く、菩薩行は甚だ難し。何となれば菩薩は一切の事物に對して、瞋恚を起すことを得ざればなりと、比丘曰く、我れ今より無上正真道意を発し、願を起して瞋恚を断じ、乃至、斯の如くにして最正覚を成せんと。時に諸の菩薩は彼の比丘が無瞋恚の願を発せるを見て、皆呼んで阿閦と號せしに、大目如来も亦歓喜して阿閦と呼び給えり、是より彼の比丘を阿閦と稱す。阿閦比丘は既に大目如来の下に於て發願し、後備さに積功累徳して遂に東方阿比羅提世界に成佛し、今現に彼に在りて説法すると云へり。」とある。この東方阿比羅提浄土だが同じ望月仏教大辞典の阿比羅提の項目に

「abhirati（界名）梵名。西蔵名 mṅon-par dgaḥ-ba 又阿比羅提に作る。妙喜、妙楽、甚楽又は歓喜と譯す。阿閦仏の浄土の名。阿比 abhi に無比又は殊勝の義。羅提 rati は喜ぶの義なる ram より轉じたる語なり。阿閦仏国経巻上発意受慧品に、東方千仏刹を過ぎて阿比羅提世界あり、大目如来其の上に住して説法す。その時阿閦菩薩あり、大目如来に就いて記を受け、後成仏して現に阿比羅提世界に在りと云へる是なり。又同上巻快善品には、其の世界の功徳荘厳を説き、彼の国中には三悪道あることなく、其地平正にして樹木を生じ高下あることなく、亦山陵渓谷礫石崩山なく、足其地を踏めば陥下し、足を挙ぐれば還復すること故の如し。其の国中の人は悪色のものなく、亦醜者なく、婬怒癡もなく、風寒気の三病もなく、又牢獄拘閉の事もなく、衆邪異道もあることなし。樹には常に花實あり、人民は皆樹より五色の衣被を取りて之を著す。食は念ずる所に随って自然に前に在り。人民の臥起する所は、七宝を以って交露精舎となし、又七宝を床とし、上に好綩綖を布く。又浴池あり、八味の水其の中に満てり、彼の国中には王なく、但だ法王阿閦如来佛のみあり。又彼の佛国は大寒太熱ならず、風は徐に起りて甚だ香快なり。彼の国の女人は其の徳天女の如く、玉女寶に勝ること百千万億倍なり。その女人には女の過失なく、又妊身産時に心身疲れず、安隠にして苦なし。又其の国中には日月の光明照らすことなく、阿閦如来

の光明ありて、常に三千大千世界を照す等と云へり。此の中、彼の国中に女人及び妊身等の事ありとし、又樹上より五色の衣被を取りて之を著すと云ひ、又三道の寶階ありて忉利天に通ずといひ、其他彼の世界の荘厳等に関する記事が、尚甚だ理想化せられざるは、即ち此経の成立が早き時代に在りしことを證するものといふべし。」と紹介して居られる。

この阿比羅提浄土の姿は妙楽歓喜の理想郷を、かなり具体的にイマージュできるが、地理上の東方界をインドないし北西インドの地より見れば、流沙の彼方の震旦、中国か、またチベット高原辺りに求めなくてはなるまい。地が平坦で山稜渓谷のないとする風景は、中国中原から江南の地を髣髴とするが、足を踏むと沙中にある様に陥没して、歩むと元のように復する様子も流沙の地面を思わせる所がある。もちろん江南水郷の地にそうした風土環境はないと云って良かろう。「人民が樹より五色の衣被を取って著ている」との記事は、人の眼を聳動させる。そのセリカの国、桑の樹と蚕より製した絹物の豪華な衣裳のイマージュが浮んでくるからであって、インドから西の人たちの中国の知見の沿革にも一瞥を加えなくてはなるまい。これについては杜村石田幹之助先生の「欧人の中国研究」(昭和二十一年十二月、日本図書株式会社刊）の第一編支那、二、古代及び中世初期に於ける支那に関する知識、のなかで次の様に指摘された。

「かくて支那のことが始めて文籍に現われ、その地の位置・住民・物産等に就いて朧気ながらも記さるゝ所に至ったのは実に西暦紀元前後からのことである。其頃欧西に伝はった支那に関する名称には二つの系統があって、一は専ら陸路より、他は主として海路によって西伝したものと認められる。即ち一は Seres、又は Serike と称する一類であってセレスは支那人を指し、セリケは支那の地を呼ぶの名称であり、他は Sin（Thin）及び Sinai（Thinai）等の一群であってシン（チン）は支那の地を指し、シナイ（チナイ）はその住民を意味する称呼であった。セレス又はセリケの系統はシン又はシナイの系統に比して稍々早くより西方に知られたかの観がある。それ

は両語ともに西方に於いて支那の繒絹を意味するセリコン（Serikon）セリクム（Sericum）の語より出たものであって、支那の名産たる絹が早くより欧西の社会に喜ばれ、古来ソグヂアナ、パルチア等の賈人を経て西輸せられ、仲介者としての彼らに莫大な利益を占められながらもギリシア・ローマの民の宝貴する所となっていたことは史上に著しい事実だからである。この絹貿易のかなり上代より存せしことに鑑みても、〝絹〟の語を通じてその産地を呼び、その産出者を名づくるといふことは相応古い時代からあり得たことと考へることが出来るだらう。シン・シナイの系統の語が後に記す如く秦の始皇帝の支那統一後、その帝国名としての〝秦〟に胚胎したものである以上、その名称の起源は紀元前二二一年を溯ることが出来ないのに比べて、絹貿易の存在は遥かに古くからのことゝ推し得るが故に、右の想像は決して不当なものとすることは出来ない。

セレスの名の見ゆる確実な書にしてその早出のものとしては小アジアの地理学者ストラボン（前六三～後二五）の地理書の如きはその一つであらう。この書は紀元後第一世紀の初期に書かれたものであって、アレキサンダー大王の覇業敗れし後、世界学術の淵叢であったエジプトの首都アレキサンドリアの学者たちの業績を集大成したものの一つであるが、その第十五巻第一章第二十五節並びに第二十八節にセレスの名が見える。然し当時なほその知識は極めて漠然たりしもの、如くストラボンは唯セレスの甚だ長命にして寿を保つ往々二百年を超ゆといふが如き全く荒唐不稽の語を著けてゐるに過ぎない。」（前掲書八～一〇頁）

そこでわたくしの架蔵する彼が地理書（H. C. Hamilton, W. Falconer; The Geography by Strabo, 3 vols, Bohn's Classical Library, vol. B.XV. Ch. I. 34）を閲すると、「オネシクリトス Onesicritus は亦ムシカヌス Musicanus の国について讃えて長々と物語り、そして他のインド諸族と同じ住民たちに触れて、彼らは長命で、そして寿命は百三十歳に迄保たれていると云う。（併しながらセレス人は或る著作家によると更にもっと長生きしていると云われている。此処でセレス人と謂うのは、彼らの国や首都は依然として尚セルヘンド Serhend の名をもってい

る。それは中世のセリカ・インドであって、そしてこの国にユスティニアヌス帝は絹の蚕の卵を苦心して手に入れるため使節を派遣したが、ヨーロッパに絹を導入する目的だった。ストラボンはスキタイのセレスについて熟知していなかった。彼らの領地は現在セリナガルと呼ばれていて、その頃から古代人は羊毛と美しい織物を生産して現在カシミールから得られるものである。亦ストラボンはインド半島に住んでいたセレス人について熟知していないで、彼らの領土と首都はセラと云う名前を持っていた。プリニウスはこれら後者のセレス人について言及した唯一の作家である）」また第三十七節の所にも、「例えば蟻の譚の様に黄金を掘り出す、ヘロドトス「歴史」巻三102―「犬よりは小さいが狐よりも大なる蟻がいて、此の蟻が地下に巣を造り、恰度その形も非常に酷似してゐるがギリシアにゐる蟻と同様に、砂を搬び上げて来るのであるが、その運び上げられた砂の中に金が含まれてゐるのである。」（青木巌訳、ヘロドトス歴史、昭和十五年八月、生活社刊、三〇四～三〇五頁）―特殊な形姿をした動物や人間たち、それに途方もない能力の所有者たち、セレス人の長寿も二百年の歳を超えるものもいる。」と長寿国のイマージュを伝えているに過ぎない。杜村先生は更に、「次いでローマ一代の博学洽識の士として夙に著聞せるカイウス・プリニウス・セクンヅス（紀元後二三～七九、この年ウェスウィウスの大爆発に際しその毒煙に斃る）の博物志 Naturalis Historia には支那の住民及びその特産物絹織物等に就いては誤謬も少くないが兎もかくも稍々明らかに記される所があり、茲にもセラス・セレスの名が録されている」（前掲書一一頁）と紹介されている。この博物誌は中野定雄・中野里美・中野美代子共訳「プリニウスの博物誌」（昭和六十一年五月、雄山閣出版刊）として容易に就いて見られる様になった。セレスについては第六巻二〇（前掲書第一冊、二五八頁）に、「最初の人間居住者はセレス人〈中国人〉と呼ばれ、彼らの森から得られ毛織物（絹と混同しているが、実際は綿製品のことであろう。）で有名だ。彼らは葉に水をつけた後、その白い綿毛を梳き取る。そしてわが国の婦人たちに、その繊維をほぐし、さらに織り合わせるという二重の仕事を与える。ローマの貴婦人が、人中ですき透った衣服をひけらか

すためには、そんなにさまざまな労力が必要であり、世界のそんな遠いところにあるのだ。中国人はその性格は温和だが、彼らもまた他の人類と交わることを避け、商人が彼らのところへ来るのを待っているというような点では野獣と似かよっている。」と。

ストラボンの地理志の記述に較べてプリニウスの中国紹介に「森から得られる織物」を指摘している点、「人民は皆樹より五色の衣被を取りて著す」とある阿閦の坐す阿比羅提東方浄土の記載に適合する。もちろんヘレニズム・ローマ期の地理学者、博物学者の知見知識を遡ると、西アジア世界から北西インド、更らに中央アジア諸民族を経由していて、所謂シルクロードの終着点である中国の薄明模糊たる姿が捉えられるに過ぎなかろう。阿閦佛国経の撰述された当時のインドならびに北西インド周辺民族の、中国認識の度合も吟味してみなくてはならない。この点について再び杜村先生の見解を聴いてみたい。

「シン・シナイ等の語はその源の語はその源を紀元前三世紀の終に（前二二一）支那に於いて始めて一統王朝を創設し、その勢威四隣に鳴った〝秦〟の名に発するのであるからそれ以前にこの一系の語が西傳することは考へられない。（中略）されば秦の名称はこの時に（筆者注、漢代）至って一層広く北は漢に臣服せる匈奴に用ゐられ、西は張騫の遠征によりて中央アジアより西北印度に唱へられ、西南は四川、雲南の経略、即ち所謂西南夷の招撫開発によって東北印度にも伝はったであらうし、広東附近を中心とする南方海上交通の進展に應じて印度支那半島乃至マレイ諸島より南印度にも達したことであらう。（中略）上来挙げ来ったような学者・著述家の記す所を一言に要約せば、セレス・シナイの国は当時知られたる世界の東極に位して太洋に臨み、領域広大人口稠密にして西はイマオスの山近處とバクトリアとの境に至り（セリケ）、又ガンガ左岸の印度地方にも接してゐる（シン）。住民は開明にして温和・正直・倹素であり、隣人との争を慎しみ、内気にして深き交際を回避するが如き風あり、而もその物産を売るは敢て之を辞せず、生絲並に絹織物はその尤なるものであって毛皮及び優良なる鉄も

亦その特産の一つであるといふに尽きる。その最も有名である絹に就いてさへも、紀元前一世紀のローマ詩人の如きは具体的な知識を有せず、云ふ所甚だ空漠なるもののみで、例へばウェルギリウスの如きも絹はセルスにより森林の樹葉より製出せられるものとなし、ギリシアの地学家前記ディオニシオス・ペリエゲーテスの如きも絹は竹葉より作らるゝものと考へていたくらゐであって、二世紀の後半、パウサニアスに至って始めて生絲は蜘蛛の如き昆蟲の供する所であり、その産出は一つにこの昆蟲の飼育による旨を明かにし、不完全ながらも養蠶の術に就いてその一端を世に伝へることゝなった程度であった。なほ当時この極遠の地方に對する知識の如何に不十分にして矛盾憧着に満ち、怪奇の虚譚又少くなかったかに就いては直接一々の記載に徴して之を知る外はない」（前掲書二〇～二八頁）とされ、また、「支那の名は早く既に印度に知られたと云ふ説があって、マハーブハーラタの物語に見えるチーナは支那を意味しマヌーの法典に見えるチナスは即ち支那人を指すものに外ならぬといふ意見であるが、これは古くラッセンなどに依って唱へられ、又近時ヤコビ氏の提唱に係るチャンドラグプタ大王の宰相 Kautiliya の著に見えるチーナの称は支那であるといふ説もその一つであってこれにはラウファー氏の熱心な賛同もあり、ラ氏は之を以て今日の広東省及びそれ以南の海岸を指す非常に古い時からの称呼（恐らくマレー人の附したもの）から出たものであらうとの假説を提唱せられたが、これらはいづれ確実なる典拠を缺く説であってやはり一種の想像と解する外はない。云ふ迄もなくマハーブハーラタやマヌーの法典の如きは紀元前数百年の古いものであるし、カウチリヤの著作年代は紀元前三〇〇の頃と考定されるものであるから、これらの名称が若し眞に支那を指すものとすれば、これ亦秦とは別箇の解釈を要するわけであるがその果して然るや否やは深い疑問に属するから、吾等は今日に於いてこれらの説に賛成を躊躇し、寧ろ之を駁したペリオ氏の意見をこそ尊重しなければならないものと考へる。」（前掲書二六頁）と極めて慎重な意見を洩されている。

こうして見てくると阿閦仏の阿比羅提浄土は単なる空想捏造の楽園世界ではなくて、その風土環境、住民の資

性習慣に東方主国チーナ、チナスの残像が遥曳しているように思うのは、わたくしの僻目であろううか。

阿閦東方阿比羅提浄土がすでに静谷氏の説くように、成立地域は不明ながら撰述時期を紀元前後から一世紀末頃とすると（前掲書二五六頁）、次なる東方瑠璃光薬師浄土の成立をどの様に考えたらよいのであろうか。

望月佛教大辞典の薬師如来の項目を先ず抄記してみる。

「薬師は梵語 bhaiṣajya-guru の譯、西藏名 sman-gyi bha. 一に薬師瑠璃光 bhaiṣajya-guru-vaidūrya-prabha 如来と稱す。薬師如来本願經（隋達摩笈多譯）に依るに、東方十恒河沙等の佛土の外に世界あり浄瑠璃と名づけ、其の土に佛あり、薬師瑠璃光如来と號す。彼の如来は本と菩薩行を行ぜし時、十二の大願を發す。一に我れ來世に菩提を得ん時、自身の光明熾然として無量の世界を照曜し、三十二相八十種好を以て莊嚴となし、一切の衆生をして亦我れと異なからしめん。二に我が身瑠璃の如く、内外清浄にして瑕垢なく、光明日月に過ぎ、人をして昏暗の中にも方所を知り事業を作さしめん。三に智慧方便を以て衆生をして受用無盡ならしめん。四に異道を行ずる者をして菩薩道に安立せしめ、二乗の道を行ずる者をして大乗に安立せしめん。五に我が法の中に梵行を修する者をして一切皆戒を缺減せざらしめん。六に諸根不具聾盲跛躄白癩顛狂乃至種々の身病める者、我が名を聞かば皆諸根具足し、身分成満することを得しめん。七に諸患逼切して護なく依なく、一切の資生醫薬を遠離する者、我が名を聞かば衆患悉く除かん。八に若し女人ありて女形を捨てんと願ふ者、我が名を聞かば丈夫の相を成ぜん。九に衆生そして魔網を解説して正見に安立せしめん。十に王法に繫縛せられ、無量の災難煎迫するも、我が福力を以て皆苦悩を解説せしめん。十一に飢に迫られて諸の惡行を作る者あらば、我れ香味の食を以て其の身を飽食せしめん。十二に貧にして衣服なき者は、我れ當に所用の衣服乃至莊嚴の具を施すべしと。是の如き十二の大願を發し、遂に成佛して今彼の浄瑠璃世界に住し、其の國土の莊嚴は極薬國の如し。其の中には日光・月光

の二菩薩あり、彼の如来の正法藏を持す。若し人重病に嬰りて死相現前し閻魔の使人其の神識を引いて閻魔法王の前に置き、罪福に随って将に處分せられんとする時、此の人の為に書夜六時に彼の如来を禮拝供養し、四十九遍此の經を讀誦し、四十九燈を燃し、四十九天の五色の綵幡を造らば、卽ち夢より覺るが如く此の人の神識還復して、其の命を續ぐことを得んと云へる是なり。蓋し薬師如来の崇拝は主として其の所謂續命法に基くもの」（巻五、四八九〇～四八九一頁）と解説している。

先ず薬師 bhaiṣajya-guru なのだが、Monier-Williams A Sanskrit-English Dictonary に Bhaishajya 医薬治療薬効の意を挙げ、実例として病気治癒に試みられる儀礼としている。薬師如来十二大願のなに第六願と第七願に諸器管の疾患に仏名を聞き唱するだけで治癒する由を述べ、貧困飢餓にも対應する能力が述べられている。これら疾病に対するインド人の医薬知識の起源、そして展開の様相を此処で一瞥する必要が惹る。

此処でまずD・チャットーパディーヤ著、佐藤任訳「古代インドの科学と社会―古典医学を中心に―」（昭和六十年九月、同朋舎出版刊）の第二章反動イデオロギー、一九、魔術・宗教的治療術から合理的治療術へ、の項目から引用してみる。「『チャラカ・サンヒター』は言う。『アタルヴァヴェーダ』で奨励されている治療は、（聖職者への）寄進（dāna）宥和の祭式（svastyayana）、供物（bali）、吉祥な行事（maṅgala）供犠（homa）、誓願（niyama）、懺悔（prāyaścitta）、断食（upanāsa）、呪文（mantra）などに基いている。われわれの言い方によれば、これは古代インドの魔術・宗教治療術であり、病気は超自然的な作因によって惹き起されるという推測に基いている。（中略）

魔術・宗教的治療術から合理的治療術へのこの移行は、インド医学史にとってきわめて重大である。『チャラカ・サンヒター』がそれに注目させようとしている方法もまた、それなりに興味がある。そのことは、文献が両者の相違を説明する必要があると考えているその文脈から読みとることができる。この相違はアーユルヴェーダの一

般原理、すなわち『チャラカ・サンヒター』のスートラ・スターナ（總論）を説明するなかで、初めて紹介されている。それは、とりわけ医師の理論装備として必須と見なされた論理的・認識論的カテゴリーを明らかにすることを目的としているものとして、すでに述べておいた章で再び取り上げられている。両方ともその内容は、魔術・宗教的治療術と合理的治療術との基本的相違を理解することが、実践している医者の概念を明確にする上で重要な意義のあることを示している。（中略）医学の理論と実践に精通することは、正確には何を意味しているのか。『チャラカ・サンヒター』は、やや詳しくその問題を答える必要があると考えている。それは言う。

医術には三種類ある。すなわち〝超自然力に基いているもの〟（ダイヴァーヴィヤパーシュラヤ）、〝合理的適用に基づいているもの〟（ユクティ・ヴィヤパーシュラヤ）そして〝精神的統御に基いているもの〟（サットヴァーヴァジャヤ）がある。

これらのなかで〝超自然力に基いている医術〟は、呪文、薬草、宝石、吉祥な儀式、供物や寄進、供犠、誓願、儀式張った懺悔、断食、宥和の祭式、参拝、巡礼等々から成り立っている。

〝合理的適用に基いている医術〟は、いろいろの物質を食餌や薬剤として処方することから成り立っている。〝精神的統御に基いている医術は〟、有害なものから精神を引きこもらせることから成り立っている。」（前掲書、三四六～三五〇頁）

「チャラカ・サンヒター」の治療技術としての医術の三種類に、超自然力に依る薬草利用と、「合理的適用の医術」に種々の動・植・鉱物を食餌・薬剤として利用していることが挙げられていたことが知られる。そしてこれらの医術を駆使した医師たちについて、チャットーパーディヤーヤは戒律蔵のなかに姿を見せている点を、かなり克明に指摘している。すなわち、二一、『ヴィナヤ・ピタカ』の証拠、と云う章のなかである。

「文献はブッタの談話として次のように述べている。

おお比丘ちよ。病人が五つの資質をもっているときには、彼は看病され易い。（これらは）(1)彼が自分のために良いことを行うとき、(2)彼が自分のために良い食物の量の限界を知っているとき、(3)彼が自分の薬を用いるとき、(4)彼が患っている病気の習性がどんなものかを知って、すなわちそうすれば悪くなる、或いはそうすれば快くなる、あるいはこうすれば変化がないと知って彼が良いと願っている看病を考慮するとき、(5)彼が生命にとって猛烈な、鋭敏な、悲痛な、不愉快な、不快な、破壊的なものである肉体の苦痛に忍耐することができるとき。（中略）

仏教のこの伝説は、ジーヴァカ・コーマーラバッチャ（Jīvaka Komārabhacca）という仏教インドの非常に有名な医師について語っている。『ヴィナヤ・ピタカ』が、彼とその医療行為について語っていることをすぐに見ることにしよう。ジーヴァカはマガダ（Magadha）の王ビンビサーラ（Bimbisāra）の医師であり、ブッタの個人的な友人であり、またブッタ自身の個人的な医師でもあった。その多忙な業務にも拘らず、彼自身も献身的な仏教徒であり、彼はまたサンガ（僧伽）のなかの比丘たちに必要とされた医療の世話もしていた。この伝説は次のように述べている。

この時、これらの五つの病気がマガダの住民のなかに広まった。すなわち癩痛、腫物、白癩、肺病、癲癇がそれである。

これらの五つの病気に冒された人々はジーヴァカ・コーマーラバッチャの所へ行って、そして言った、『お願いします。先生私たちを治してください。』

『私は余りにも沢山の仕事をもっています。皆さん私は仕事で全くふさがっています。私はマガダ王、セーニャ・ビンビサーラを治療しなければなりません。それに王の妻妾や、また比丘の仲間と彼らの指導者であるブッタも治療しなければなりません。私は君たちを治療することはできません。』

『私たちの持っているもの全部があなたのものになるでしょう。先生、それに私たちはあなたの奴隷になりま

しょう。お願いします、先生、私たちを治してください。』

『私は余りに沢山の仕事を持っています ……等々…。私は君たちを治療することができません。』

そこでこれらの人々は考えた。

『…もし吾々が沙門釈子（Sākyaputtiya Samaṇa）たちのなかで、宗教生活入ったらどうだろう。そうすれば、比丘たちが吾々を看護してくれるだろう。そしてジーヴァカ・コーマーラバッチャが吾々を治療してくれるだろう。』

こうして、これらの人々は比丘たちの所へ行って、彼らに出家（pabbajjā）の授戒を求めた。そして比丘たちは彼らに出家と具足戒（upasampadā）の戒を授けた。そして比丘たちは彼らを看護し、ジーヴァカ・コーマーラバッチャは彼らを治療した…。

さて或る日、五つの病に冒された一人の男がジーヴァカ・コーマーラバッチャの所に行って、そして言った。

『お願いします、先生私を治してください。』

『私は余りに沢山の仕事を持っています。……私はあなたを治すことはできません。』

『私が持っているもの全部があなたのものとなるでしょう。先生、私はあなたの奴隷になりましょう。お願いです。先生私を治してください。』

『私は余りに沢山の仕事を持っています。……私はあなたを治すことができません。』

そこでその男は考えた。

『…もし私が沙門釈子たちの宗教生活に入ったならどうだろう。そうすれば、比丘たちが看護してくれるであろう。そしてジーヴァカ・コーマーラバッチャが私を治してくれるであろう。病気から解放されたら、その時には、また娑婆に帰ることにしよう。』

こうして、その男は比丘たちの所に行って、彼らに出家（パッパッジャー）の授戒を求めた。比丘たちは彼に出家（パッパッジャー）と具足戒（ウパサンパダー）、入会の戒を授けた。そして比丘たちは彼を看護し、そしてジーヴァカ・コーマーラバッチャは彼を治療した。彼が病気から解放された時、彼は再び娑婆に帰った。さてジーヴァカ・コーマーラバッチャはこの人物が還俗したのを知った。そして彼がこの男を見つけた時に、その人物に尋ねた。

『あなたは比丘たちのなかで、宗教生活に入っていたのではなかったのですか。』

『そうです、先生。』

『ではなぜ、あなたはこのような成り行きになっているのですか。』

その時その男はジーヴァカ・コーマーラバッチャに事の次第を告げた。

その時ジーヴァカ・コーマーラバッチャはいらいらして、ぶつぶつ言って非常に腹が立ってきた。彼は事の始終をブッタに報告した。その結果、これを機会に世尊は、宗教講話を説いてのち、次のように比丘たちに語った。

『おお、比丘たちよ、五つの病気に冒されている人に出家（パッパッジャー）の戒を授けてはならない。出家の戒を（そのような人物に）授けた者は、誰でも悪作（dukkaṭa）の反則を犯すことになる。』（注、mahavagga, i 39, SBE. xiii, 191～4）

このような伝説が何もない所から生れるとは考えられない。というのは、何もなければこのような重要な聖典にそれを入れる余地はないからである。教団内の修道僧に対するブッタの関心が、仏教インドにおいて最良の医療手当を受ける最も簡単で最も費用のかからない方法として、僧伽（サンガ）に加入することであるという状況を生みだしている。この利益を得ようとした抜け目ない人々があって、ブッタがそれに対する策を講じなければならないのもまた当然である。」（前掲書三五六～三六二頁）

ここに仏陀在世時代の名医として仏伝にも登場するジーヴァカ（耆婆）を望月佛教大辞より引用すると、「耆婆（ギバ）Jīvaka（人名）梵名、又耆婆伽、時縛迦、尸縛迦、嚩嚩哥、侍縛迦、或は祇婆、時婆、耆域、耆舊に作る。活、命、

能活、固活、更活、又は壽命とも譯す。具には梵名 Jīvaka-komārabhrtya 又は Jīvaka-kumārabhūra 巴梨名 Jīvaka-komārabhacca 或は Jīvaka-komarabhaṇḍa 西藏名 ḥtsho-byed gshon-nus-gsos と云ふ。就中 Komārabhṛtya は王子に育てられしもの、又は小兒を看るもの、義なり。佛弟子にして醫術を以て著はる。奈女祇域因緣經に依るに、佛在世の時、維耶梨國國王苑中に一女兒あり、奈女と名づく、顏色端正にして天下無雙なり、瓶沙王（即ち頻婆沙羅王）之と通じて男子を擧ぐ。生るゝ時、手に針藥囊を持せり。奈女則ち衣を以て児を囊み之を巷中に棄つ。蓋し印度の俗姪女若し女を産めば之を養ひ、男を擧ぐれば之を棄つるを例とするなり。時に瓶沙王の無畏、遺児を見て其の死活を問ふ、傍人あり活を答ふ。因って抱き取って之を乳養し、活の故を以て名づけて耆婆と云ふ。尋いで梵志此の小児を奈女に還付す。年八歳にして羅閲祇國に至り瓶沙王に見え太子となる。後二年にして阿闍世生る。因って宮を出で醫術を學ぶと云へり。然るに善見律毘婆沙十七等には母を奈女とせずして、王舍城の姪女娑羅跋提 salavati となし、又四分律第三十九には瓶沙王の子とせずして、王子無畏の出となせり。孰れを取るべきか詳にし難し。斯くて耆婆は醫道を習わんが為に徳叉尸羅国に至り、寶迦羅に就いて學すること七年、業成って本国婆迦陀國に歸り、先づ長者の婦十二年頭痛を悩める者を治し、尋いで拘睒彌国の長者の腸結、迦羅越家の女児及び男児の病疾を治し、又南方大国の残虐なる王の病を治し、更に世尊に歸依せしめて其内病をも除けり。其の他、世尊の風患、阿那律の失明、阿難の瘡等を療し、醫王として時人に崇仰せらるゝに至れり。又耆婆は獨り醫を以て有名なるのみならず、亦自ら深く佛教を信じ、外護者として其の功少なからず。殊に阿闍世が父を殺し悔恨の念内に萌せる時に乘じ、之を勸めて歸佛せしめたるは特筆すべき事蹟なり。」としている。彼耆婆が医学技術を習得した所が北西インドのタクシラであったことは、仏在世の時代に有名な学問の府であり大学の所在地でもあったタクシラが、一種の国際都市で西方世界の学術を輸入していた点を考慮すると興味深い。(John, Marshall ; A Guide to Taxila, Cambridge at The University Press, 1960 2. Historical, Taxila as a University

Center pp. 23～24 参照）そこにはギリシア系医術がペルシア・アケメネス朝を通じて流入していたことが、充分推測される。耆婆の更に詳細な伝承はチャットーパーディヤーヤの著作に、二三、ジーヴァカの伝説として触れられている。

「〝律藏（ヴィナヤ・ピタカ）〟にあるインド医学史の解明は光明を与える他の資料に立返ることにしよう。まさに今論評している〝大品（マハーヴァッガ）〟の医薬に関する部門で、さまざまな病気に対する医薬として規定された非常に広範囲の物質を読みとることができる。しかし誰がこれらの医薬を規定したのだろうか。しばしば文献は、ブッタ自身が医薬を規定しているという外見上の印象を与えるけれども、その示唆を額面通り受け入れるべき理由は存しない。（中略）こうした規定で、ブッタが頻りに頼りにしている或る開業医が存在していることは明白である。（中略）

それではこのような医評とは誰だろうか。〝律藏（ヴィナヤ・ピタカ）〟の〝大品（マハーヴァッガ）〟は、彼を明確に述べている。そこには、僧伽（サンガ）とその指導者であるブッタの医術の諸要件を世話している―仏教インドの最も有名な内科医兼外科医であるとされている―ジーヴァカ（Jīvaka）について語られている。そこにはまた、この医師の生活史についても語られており、その明確な特徴は興味あるものだろう。」（前掲書、三七二～三七三頁）と。

恐らく耆婆が規定した病歴（カズス）に応じた薬物の名は〝大品〟からの引用としてチャットーパーディヤーヤは「仏教インドの医学」（前掲書三六二～三七一頁）に詳細に列挙している。例えば暑気当たり食物を吐いた比丘に「五つの医薬、酥、酪、油、蜂蜜、糖蜜はそのような医薬」として与えた。脂肪質を必要として比丘には、「熊の油、魚の油、鰐の油、豚の油、驢馬の油を油と一緒に飲む」ことを誘めてもいる。しかも広範囲のいろいろの動物の脂肪の利用を推奨して―山羊、鴉、コブラ、亀、鰐、啄木鳥類（pratuda-s）、熊、獅子、駱駝、猫科の動物類、虎の脂肪―を挙げている。医薬としての根類―鬱金〔姜黄 hhalidda〕、生姜（しょうが）、菖蒲の根、白菖蒲の根、麦冬（ativisa）、黒ヘリボー（black hellebore 乾燥根茎）、ウシーラ（uśīra）の根、バッダムッタカ（bhaddamuttaka）が記されい

る。また医薬としての葉類に「ニンバの葉、クタジャの葉、パトーラ（paṭola）の葉、トゥラシー（tulasī）の葉、カッパーシカ（kappāsika）の葉および他のどんな葉類でも」利用すべきを云っている。医薬としての果実についても「ヴィダンガ（vidaṅga）、ピッパラ（pippala）、マリチャ（marica）胡椒、ハリータカ（harītaka）、ヴィビータカ（vibhītaka）、アーマラカ（āmalaka）、ミロパロン、ゴーダ（goṭha）果およびその他のどんな果実も醫薬となる」由。医薬としての樹脂類として「ヒング（hingu）、ヒング・ラック（hiṅulac）、シパーティカー（sipāṭikā）、タカ（taka）、タカ・パッティ（taka-patti）、タカ・パンニ（taka-panni）、サッジュラサ（sajjulasa）および他のどんな樹脂でも用いられる」とする。重い疥癬病に粉薬（churaṇam）、乾燥した牛糞、粘土や着色顔料、乳棒と乳鉢、また篩（ふるい）に使用を許可している。非人病（癩を指すか）に豚の生肉とその血の嗜飲を許した。

「眼病では、ブッダは比丘たちに眼の軟膏（añjana）すなわち黒い洗眼薬、ラサ軟膏（rasa-añjana）、ソータ軟膏（sota-añjana）、ゲールカ（geruka）、カッパラ（kapalla）の使用を許している。軟膏にすり潰して香りをつける必要があった時には、ブッダは比丘たちに白檀（candana）、タガラ（tagara＝L. Tabanaemn tana coronaria）、黒アヌサーリ（kālānusāri）、カーリーヤ（kālīya＝白檀の一種）、バッダムッタカ（bhaddamuttaka）の使用を許している。」（前掲書三六六～三六七頁）には軟膏に混用した白檀系の香料が見えている。しかし梵語表記が具体的な香料名を指摘できないのは残念である。また頭痛に芳香を通す煙管（パイプ）の使用についても記している。（前掲書三六七頁）

有名な丁香を中心とする薬香料については、岡本良知博士の「丁香史論」（『中世モルッカ諸島の香料』昭和十九年九月、東洋堂刊所収）に次の様に指摘された。「仏教徒と不可分の関係に於て、此の五合（筆者注、沈香、檀香、薫陸香、霍香、鶏舌香）が合香に用ゐられたかと推測し得ることである。而して此の佛教に由る理由はより多く重視されるべきであらう。

抑も佛教は後漢の桓帝の代には正しく西域を通じて支那に傳來したのであるが、稲葉博士が（注18）（稲葉岩吉氏。支

那香料の研究（東亜経済研究）一〇～四、四〇～四一頁。）維摩經の衆香國の一文を引用して説かれるやうに、これら衆香國に対する歎美文字は、一として佛と香とを不分離關係の下に律せないものは無かった。一木五香説の如きは勿論佛教と關聯して初めて理解せられ得るところである。鶏舌香も、当時は沈香、檀香等と同じく主として佛前の合香に用ゐられたことも疑ひ無い。浴佛切德經（筆者注・大正新修大蔵経第十六巻經集郎三、六九七、佛説浴像功德経一巻、唐、宝思惟訳を指すか、六九八浴佛功德經一巻、唐、義浄訳の二経を並べている）に「牛頭、栴檀、芎藭、鬱金、龍脳。沈麝、丁等以為湯、置浄器中、次第浴之」云々とあるが如きは其の一例であらう。吾人が後述する如く、印度に於いて一・二世紀の頃に用ゐられていた丁香のサンスクリット語名 Lawaṅga は、勿論印度佛教にも關聯し、多分支那へは鶏舌香の名に代へて傳へられたことであったらう。但し鶏舌香が佛教の渡来を俟って初めて支那に用ゐられるに到ったかどうかを詮議すべき論拠を吾人は有してゐない。三國時代以後支那人の江南へ移つてからは、西南海上の交通が稍々盛んになり、且つ佛教が南方に發達するに伴ふて、香料の輸入が多くなり、香料趣味が上流社會に瀰漫したことも當然である。かくして支那本草家の注目も鶏舌香に及び、醫薬説等の萌芽も早くより現はれたと推定すべきであらう。」（前掲書一二～一三頁）そして Lawaṅga について更に詳細に触れて次の様に云われる。

「此の名稱は、ジョージ・ワット氏のいふ如く、後期サンスクリット語の Lawaṅga といはれる語より出てゐる。ワット氏は、印度学者トーマス氏に訊ねて、此の語が早くラーマヤナに現れ、又之を丁香の意味にとった最初の醫學書がチャーラカの著書であるとの消息を得たといふ。（注32）George Watt; Commercial Products of India, London, p. 527.）マジュムダル氏の印度植物史に見ている所でも Lavanga はチャーラカの果樹類中に記録されて、丁香の意味に用ゐられた。（注3）Crawford, Dictionary, p. 101)而し此の言葉が印度の近代語に入って Lavanga, Livinga labang, long, raung 等に變わってゐることを説いたワット氏はトーマス氏の其の語源に関する推察を

次の如く紹介した。『此の語が〔元来〕マライ語だらうとの見込は極めて大きいではないか。マライ語の外見を有してゐる。マライ語では bunga lawang として用ゐられる。bounga は華やかなといふ、殊に花といふ意味であり、lawang 其のものは荳蔻花として使はれるようだ。』(注34) Watt; 前掲書五二七頁)

更に第二章西方諸國に於ける丁香、第一節西方諸國への伝播、として次の様に云われる。

「西方の諸國に於ける丁香史を説くには印度古来の文献に就いて知るところが極めて乏しい。これは此處には心付いた少數の例を指摘するに過ぎぬ。ジョージ・ワット氏の關説(注1) George Watt; Commercial Products of India, London, 1908, p. 527) 〔筆者の見た「インド物産事典、George Watt; Dictionary of the Economic Products of India vol. I~III」のなかの丁字香に就いて語源学に触れていない。〕するところに據れば、丁香のサンスクリット語名たる Lawaṅga の最古の記録がラーマヤナに見られるといふ。同氏の引用するトーマス氏の調査に從えば、之に觸れる最初の醫學者はチャーラカであった。近代に於ける香薬史に最も精通するフィカリュ伯爵も亦丁香即ち Lawaṅga の最も古い説明はチャーラカに見えるものであると考へた。(注2) Comte de Ficallo-in Colloquios I pp. 375, 368)。ラーマヤナ現存書の形式は多分二世紀の末に完成したといはれ、チャーラカは古代印度の醫聖と称せられ一世紀にゐた人であるが。現存の書は八・九世紀の間の改修本と傳へられている。又チャーラカに次ぐ飲食經として知られるスーシュルタのスートラスタナにも丁香の特性が記されてある。(注3) G.P. Majumdar, Vanaspati, Plants and Plants-life as in Indian Treaties and Traditions, Calcutta, 1927. p. 117 所引 Susrta, Sutrāsthana, Chap. XLVI-in Vanaspati, p. 305) 以上の摘録によって必ずしも印度の丁香の使用の時代を確定的に遡源し得るに至らないが。すくなくとも一・二世紀を下らぬ頃には印度で用ゐられてゐたことを吾人に暗示するものであらうと思ふ。而して丁香が何處より齎らされるかを正しく知られなかったとしても、其の方向だけは印度に於てわかってゐたことは次に引用する資料によって推察出来る。四世紀末に東晋の西域僧迦留陀伽の譯出し

た佛説十二遊經（筆者注、大正新修大蔵經第四巻本縁部下一九五、佛説十二遊經一巻、東晋迦留陀伽訳とあり）に、海中の二千五百國を數へ、其のうちの闍耶に蓽茇と胡椒を、不羅に四十二種の香と白瑠璃を出すことが見えてゐる。闍耶がヴィジャヤに該るものと見做され、且つ城の意味を有する不羅は何島を定められぬが、兎に角香料と白琉璃が南海から來る産物であったらう。（注4 龍山章眞氏、「南方佛教の様態」、二三八頁、大谷敏治氏、「インドネシア民族史」、一二九頁所引）さればスマトラ島、ジャワ島の香料は別として、東方諸島の諸香料を四十二種の香中に含めらるべきは當然であり、丁香も亦其の一種であったらう。又六世紀にタプロバナ卽ち今のセイロン島に赴いたアレクサンドリアのコスマス（インディコプレウステス）は、丁香が生絲や他の香料と共にセイロン島よりも遙かに遠い東方から輸入されたことを傳え、且つカベルより遠方に丁香の國があり、更に其の彼方に生絲を産するチニツヤ卽ち支那があり、夫れより前は東方を大洋に圍繞されるから最早國がないと記した（注5 Yule 又 Cordier; Cathay and the way thithers vol. I. p. 228）之を以て考へれば、當時セイロン島では丁香原産地の方向だけが漠然とわかってゐたのであらう。」（前掲書六一～六二頁）

インドの医書「チャーラカ・サムヒター」やスーシュルタの「スートラスターナ」に丁香を始め薬香料が用いられていることが検証されている。亦「佛説十二遊經」のなかに「西北に月支天子有り、土地好馬多く（中略）魚は六千四百種、烏は四千五百種、獸は二千四百種、樹は万種、草は八千種夫々有し、雑薬七百四十種、雑香四十三種、宝は百二十一種、正宝七種（中略）第三王名は不羅、土地に四十二種香及び白琉璃を出す。第四王名は闍耶。土地に蓽茇・胡椒を出す。第五王名は那額、土地白珠と七色瑠璃を出す。五大國の城人黒くして短小、相去ること六十五万里」、と記している。月氏天子は、月氏五翕侯の一人で貴霜王朝として中央アジアに覇を唱え、有名な崇佛王迦膩色迦を出した國としてみると、雑薬七百四十種と雑香四十三種が自生採集した土産のものとするより、東西交易の中枢に位置した國柄として東西南北の薬種香料を挙げていると見做せよう。さらに不羅國が四十二種

の香と白琉璃を産出、闍耶に蓽茇と胡椒、そして那額に白珠と七色瑠璃の産出を挙げている点、頗る興味が湧く。不羅は Skt. Pura 都城の意味で何れの島と決定できぬのは岡本先生の指摘される通りだが、闍耶はヴィジャヤで Vijaya はサータヴァーハナ Sātavāhana 朝のシュリー・ヤジュナ・シャータカルニ（略西紀一七〇～一九九）の後継者の一人で、彼の発行した貨幣がボムベイのアコーラ Akola に発見されている由 K. A. Nilakanta Sastri; A History of South India 2nd Ed. Oxford. U. P. 1958. p. 92 に触れている王と思われる。インドの西南部に蓽茇（蓽撥）と胡椒を産するとするこの經典の文句は、更に、山田憲太郎氏の「東亜香料史研究」（昭和五十一年二月、中央公論美術出版社刊）胡椒の項目の蓽撥の記事によって補われる所が多い。

「この蓽撥（pi-po）は明白にインドの長胡椒をいう pippali の li を略した音を写したもので、叢生で茎と葉は蒟醤に類似し。果実が緊細であるというのは乾燥した漿果の状態をよく示し、香味は蒟醤より辛辣であるなどと、相当正確に長胡椒を説いている（「證類本草」の蓽撥の項）とすれば七世紀のころ、インドの普通の。ペッパーと長胡椒とが中國に伝播していたと見てよかろう。しかし『證類大観本草』九は蓽撥の条で『海薬本草』に「除表、南州記、本出南海、長一指、赤褐色為上、云々」とあるという。『南州記』は、正しくは徐衷の『南方記』すなわち〝南方草物状〟であるから、四、五世紀の晋朝代に南方海上經由でインドの長胡椒が知られていたことになる。それからこの南海に出すというのは、あるいは早くジャワの長胡椒を指したのであろうか。この点は今しばらくとしておこう。また長さ一指では乾燥漿果としては長すぎるような気もするから、あるいは根茎を指していたのではなかろうか。八世紀初半の陳蔵器は、根茎は紫胡に似て黒くて硬いといっているから、赤褐色を上とするのは当っているようである。また臓器は、蓽撥の漿果と根茎を区別し、『生波斯國、胡人将来、此調食用之』と記しているから、イラン系の人びとによって中國に将来され調味料に使用されていた消息を伝えている。しかし唐の太宗の貞観年間に（六二七―四九年）太宗が下痢で苦しんだとき、乳煎蓽撥の薬湯を服用して全快したと伝え

られている。（注18 この話は『證類大観本草』九の『図經本草』に伝えるところである。曰く「唐太宗實録日、貞観中、上以気痢久。未癒、服它名醫薬、不應因詔訪求其方、有衛士、進乳煎蓽拔法、御用有効」と。）だから七世紀に蓽撥があるいはインド産であるということを、中国人は知っていたのだろうと推定されないこともないが。胡椒とともに、いやそれ以上に貴重な醫薬品であったようである」（前掲書二三二～二三三頁）

さて更に興味深いのは不羅國の産物の四十二種香と白琉璃である。東方琉璃光薬師浄土を考える際に見逃せぬ記事の一つと云えよう。

此処で松本文三郎先生に御登場願わなければならなくなる。「琉璃考」（『東洋文化の研究』大正十五年十一月、岩波書店刊、所収）の論考がそれである。

「元来琉璃は、印度にあつては寶石として最も重要視せられ、寶珠中の寶珠とも見做されたものである。而して或は其光彩の浄瑩なるより、或は其體質の堅緻なるより。佛菩薩乃至龍王の名に迄之を轉用したことも少なくない。例へば薬師琉璃光佛といひ、琉璃妙國、琉璃金色、日月琉璃光、無上琉璃光佛等（康僧鎧、無量壽經）といひ、大琉璃龍王（法護、如来興顯經巻三）といふが如きである。又印度でば古來四寶とが七寶とか稱せられ、佛典中には屢々其名が顯はれ来る。四寶とは金・銀・琉璃・頗黎を稱し、七寶とは普通前四者に加ふるに車渠・馬瑙・眞珠の三つを以てするのである（大智度論巻十）。（中略）

琉璃は何時頃から印度人に知られたのか、是れも明らかならぬ。吠陀時代にはまだ其語も顯はれて居ないやうである。が佛教の本生譚には既に海水の色の譬喩として出て居るから（Suppâraka-Jātaka）遅くも紀元前四・五百年の頃には、既に印度人の問に知悉せられて居たことは疑ひない。（中略）

佛典には普通琉（又は瑠）璃、若くは吠（又は毗）琉璃といふが。其音譯字なることは言ふ迄もなく（中略）思ふに毗琉璃又は毗琉璃耶は印度俗語の形 veluriyam 若くは其轉訛の音を寫したものなるべく、又鞞頭梨とある

のは梵語 vaiḍūrya より直接間接轉じ來ったのであらう。クラップロート氏に据れば畏兀兒。韃靼、土耳古乃至ブカレスト等の民族の間では bolor とか belur とか稱へて居るといふ（F. Hirth—Chinesische Studien, S. 63）が是れは支那の毗琉璃（古音 beluli といふ）から更に轉訛したものらしい。而して希臘語の βηρυλλος 羅甸語の bêryllos（又は -us, berullus）も印度語と同一語源から來たことは疑ひなく、近代語の beryl は言ふ迄もなく此羅甸語から轉訛したのである」。（前掲書二二九～三〇四頁）と説き始めて居られる。そしてその性質産地に言及して、

「海水を琉璃に比するのは、言ふ迄もなく其青色清浄なるを示すものである。毗婆沙問經（巻二）には『其眼猶如青琉璃』といひ、大集經（巻三）にも『眞正青琉璃珠』とも『青琉璃』ともある。十誦律（巻二十六）には紺琉璃牀。維琉璃鉢、紺琉璃盤等、幾回も繰返紺琉璃といふ。勿論此に云ふ牀とか鉢とか盤とかは實在のものではなく、寓意の説話に過ぎない。其他何れの経典にあっても皆之と同様である。（中略）從ってヒルト氏が琉璃を以て半透明の、而して琉璃を以て透明なる硝子であるといったのは（China and the Roman Orient, p. 230）假令ひ多少眞実であるとしても、是れは後世隋唐頃の思想であって、此等は印度人の眞の所謂琉璃とは全然區別すべきものであらうと思ふ。又彼の魏略に述べる大秦國に赤白黒緑黄青紺縹紅紫十種の琉璃を産したといふ（注4 三國志巻三十、引く所の魏略にはいふ。大秦多金銀銅鐵……明月珠、夜光珠、眞珠琥珀珊瑚、赤白黒緑黄青紺縹紅紫十種琉璃、璆琳琅玕水精玫瑰等。）が如きも、決して眞の琉璃ではなく、佛典に所謂假琉璃に属すべきものたるは明らかである。」（前掲書三一一～三一二頁）と。

ここで端なくも碩学 F. Hirth 氏の琉璃＝ガラス説を名著の誉れ高い China and the Roman Orient: Researches into their Ancient and Mediaeval Relation, Leipsic & Munich. 1885, 亦 Chinesische Studien by Friedrich Hirth, Erster Band München und Leipzig G. Hirth's Verlag, 1890, 所収の Zur Geschichte des Glases in China, を瞥見し、又吾が白鳥庫吉先生が「大秦の木難珠と印度の如意珠」（昭和八年八月市村博士古稀

記念東洋史論叢、「西域史研究」下、昭和十九年四月、岩波書店刊、所収）中に見られる、琉璃に関説している所を注目しなくてはならない。

先ず松本先生引用のヒルト博士の「中國に於ける硝子史考」六三頁の該当部分は、「それに対して琉璃、玻璃の二つの表現は一方を水精、他方を硝子を意味するものとしてベルール（belur）が多くの中央アジア言語と関係があるようにわたくしに思えるが（ボロル bolor と belur・ウィグル語、蒙古語（タルタル）、トルコ語、ブハラ語等々でクラプロート氏による）」によっている。一方琉璃＝硝子説を披瀝しているのは、所謂「大秦全伝」（China and the Roman Orient）の二三〇頁と松本先生は注記して居られるが、二二八～二三〇頁に渉っての記述である。すなわち、

「ガラスは、関聯記事のなかに琉璃と呼ばれ他の個所では玻璃、頗黎等と呼ばれている。わたくしが中國で珍貴な東西（しなもの）を商う連中に関して知る限り、この琉璃と玻黎の間に差異があって、琉璃は不透明で玻璃は透明の差のように見える。琉璃は亦俗に料と呼ばれて『ガラス器』に対する名称として商売上料器とされる。（中略）中國人はガラスの或る物を寶石と考える傾向があって、佛典の七寶を構成する他の寶石と同一の範疇に置いたが。長い間これら七寶の実体について知識がなかった。併し彼らが自分の國でガラスを製造することを習うと、これらの東西の意味を実際に当嵌めて『ガラス』とし、歴史的ないし文芸の意味にも用いたらしい。譬喩的に琉璃は透明度の点で不透明なガラスに似た物の名であるようになった様だ。（中略）『廣雅』を、前漢書西域伝補注を施した徐松学、（道光期の秘書官の一人）が引いて、琉璃の元来の名は璧琉璃ないし吠瑠璃だったと云う。（中略）璧琉璃、又吠琉璃の綴字の古音はベロリ＝beloli であったらしく、梵音と説明されていて、その語は必ずしも梵音に限定されない。誰れか他の適当な示唆は兎に角、この語が belor、乃至 bolor の語で種々の中央アジアの言語でガラスないし水精を意味するものに当ててみたい。」と。

次に白鳥先生の所論を摘記してみようか。

「琉璃は梵語であって、佛典の中では種々の文字で書かれてゐる。その中、吠瑠璃。吠瑠璃耶。昆瑠璃は完譯、琉璃、瑠璃は略譯であって、何れも原語 veluriya の對音である。又之を鞞頭梨、鞞稠利夜、吠努璃野といふのは梵語 vaiḍūriya の對音であって共に英語の beryl 即ち aquamarine を指すのである。此の寶石は今日でこそ新世界では Brazil 欧洲では Savony、アジアでは Ural, Altai 等の山脈中と Burma とに産出するやうになったけれども、上代では印度のみが此の寶石の産地であって、此處から廣く外國へ輸出せられたものである。かやうな事情から琉璃は印度では古來七寶の一つとして非常に珍重せられたので、それが自然と金翅鳥説話を構成する一材料となったものであらう。

南越志に本難珠金翅鳥の口邊から流出する涎沫の凝固したものであるといふのは、一切經音義に琉璃は金翅鳥の卵殼であるといひ、又増一阿含經に琉璃は此の鳥の心臓であるといふのと互に相類する所があるといふので、章氏（章鴻釗著「石雅」木難珠を琉璃 aquamarine と考定、巻上、三三頁）は大秦國の木難珠は卽ち印度でいふ琉璃珠であらうと推定した。此の説は一應尤ものように聞こえるが、佛典に現はれてくる説話の中で金翅鳥と關係する寶珠は必ずしも琉璃のみに限ってゐない。（中略）

一切經音義とか増一阿含經とかいふ様な佛典の中に見える琉璃は veluriya の對音で今日の aquamarine であるが、歴代の大秦傳や拂菻傳中に出てくる琉璃は全く別物である。魏略の西戎傳大秦國の條に此の國の財貨を列擧した所に「赤白黒緑黄青紺標紅紫十種琉璃」とある。aquamarine の色は殆ど青と定ってゐるから、此の世の中に十色に區別される aquamarine は無い筈である。Hirth 氏が大秦國の琉璃を硝子と解したのは當然の事である（China and the Roman Orient, p. 223）。又晉書（巻九八）の大秦傳には「琉璃為牆壁」といふ文句があり、また唐書（巻一九八）の拂菻伝に「其宮宇柱櫳、多以水精琉璃為之」といふ文句がある。aquamarine で牆壁や柱

掩の造られるとは到底想像することが出來ないから、此處の琉璃も亦硝子を指したものに相違ない。琉璃を硝子の意味に使用したのは獨り大秦國や拂菻國の傳文のみに限らないで、他にも幾多の例證があると思はれるが、その中に於いても最も著名となってゐるのは魏書（巻一〇二）の西域傳大月氏國の條に琉璃製造の起源を敍した左の文である。

世祖時、其國人商販京師、自云、能鑄石為五色琉璃、於是採礦山中、於京師鑄之。既成、光澤美於西方来者、乃詔為行殿、容百餘人。光色映徹。觀者見之。莫不驚駭、以為神明所作。自此中國琉璃遂賤、人不復珍之。

此處の瑠璃卽ち琉璃が硝子であることは甚だ明白であって、之を疑ふ地は無い。是に由って之を觀ても、大秦傳や拂菻傳中の琉璃は硝子であって。一切經音義などの琉璃卽ち aquamarine を指すものと混同すべきではない。」（前掲書七九六～八〇二頁）と佛典の琉璃が aquamarine の寶石に対して、地中海世界・西アジアで産出する琉璃が硝子を指すとされた。例の「佛説十二遊經」に記された不羅國の白琉（瑠）璃は透明ガラスであり那額國産の七色瑠璃もガラスと考えて良かろうではないか。

むすび

ここで東方琉璃光薬師浄土を説く薬師經の成立と時期の問題を、上記の諸点を勘案しながら推究してみよう。すでに東方阿閦仏の阿比羅提浄土のイマージュに陸路で連接する東方中國が投影していること触れた通りである。その東方浄土に重ね合せた薬師琉璃光浄土を新たに設定、經典を成立するにはそれなりの理由がなくてはなるまい。西方阿弥陀極楽浄土と対偶する新たな浄土観の成立を促す機縁があった筈である。陸路、海路の東西交流が紀元前後から遽かに活性化して、エジプト・ギリシア・西アジア・イランの楽園不死不老世界の投影が西方極楽浄土に見られたこと、既に見てきた所から知られよう。わたくしは、大乗佛教成立の時期が北西インドのみ

ならずインド南部でもギリシア＝ローマの貿易交渉の活性化した時点に当るのを重視したい。しかも地中海世界・西アジアの商人が当時最も希求した東西（しなもの）と云えば、薬香料であったのは勿論である。そうした研究の尤なるものは既述の山田憲太郎氏の著作「東亜香料史研究」であり、西欧では J. Junes Miller; The Spice Trade of The Roman Empire 29 B. C. to A. D. 641. Oxford at the Clarendon Press, 1969 であろう。亦 E. H. Warmington; The Commerce between the Roman Empire and India, Cambridge at the University Press, 1928 の名著も逸することはできまい。ローマ帝國全般の通商路を扱った M.P. Charlesworth; The Trade-Routes and Commerce of the Roman Empire, Cambridge U.P. 1924 の二章から四章に及ぶエジプト・シリア・インドとセイロンへの海上路も参考になり、インドと中國への陸路を述べた第六章も役立つ。考古学の資料を基調にしたローマ帝國の辺疆域での交渉通商の問題は Mortimer Wheeler; Rome beyond The Imperial Frontiers, London, G.Bell and Sons, Ltd, 1954（邦訳、糸賀昌昭訳「大ローマ帝國の膨脹」昭和三十二年十月みすず書房刊）の第三章アジアの項目で扱われている。

これらの著作を通じてローマの東方貿易の実体を如実に、当時の航海者、商人としての実体験を踏えた珍籍によっていることが知られる。これは無名子の *περίπλους τῆς Ἐρυθρᾶς θαλάσσης*, Periplus Maris Erythraei「エリュトゥラー海案内記」である。多くの訳注本があって、筆者架蔵のものでも六種の数え上げることができ、その先鞭は William, Vincent; The Commerce and Navigation of The Ancients in Indian Ocean, 2vols, vol. II London, 1807 によってつけられた。全文の訳注と云うより地名をその当時の古典文献と関聯文献を駆使した考証からなっている。その全訳と詳細な考注研究は Wilfred H. Schoff; The Periplus of Erythraean Sea, Longmans, 1912 が最も著名で権威あるものとされた。その後かのハックルート叢書本の一冊として G.W.B. Huntingford; The Periplus of the Erythraean Sea, Hakluyt Society London, 1980 が出版され、更に Lionel

Casson; The Periplus Maris Erythraei, Princeton University Press, 1989 が最新の訳注本と云えるだろう。今遽かにこれら諸本の特長の種々相に触れるのは、聊か本題から逸脱するので又の機会を俟ちたい。むしろ邦訳として村川堅太郎先生の「エリュトゥラー海案内記」（昭和二十一年十一月、生活社刊）が序説としての研究論考を含め詳細なる注記を附されて刊行された。その注記に上記スコッフ本が屢々論及されている。初版本は今日一種の稀覯本扱いとなり入手困難であったが、幸い一九九三年十月、中公文庫の一冊として増田義郎氏の解説を加えて刊行され、容易に入手可能となったことは嬉しい。その序説の六、各港輸出入品、貿易品の権観にその表示があり、その総轄として「ローマ帝国の中心たるイタリアは甚だ物産に乏しかった。本書に見ゆる東方への輸出品中イタリア産と分るのは〝イタリア産の葡萄酒〟（六、四十九節）一つに過ぎない。（中略）南海各地の富裕者の渇望を満していたのはエジプト及びフェニキアのシードーンやテュロスで盛んに造られたガラス器（ὑαλῆ λιθία）であった。エジプトに於けるガラス製造が非常に古い時代に遡り得ることは人の知るところであるが、〝ガラス吹き〟の技術の発見がローマによる支配の開始の頃に置かれているのが正しいとすれば（注9 Reil; Beiträge zur Kenntnis des Gewerbes im hellenistischen Aegypten, 1913, p. 47. Johnson; Roman Egypt (an economic Survey of Ancient Rome, vol. II 1930, p. 3361）〝案内記〟の時代には正に新技術による珍しい製品が人々の欲求を駆り立てていたわけである。ガラス加工法はインドにも知られていたはずである。何となれば〝案内記〟にはアフリカ海岸とインドの Barbarikon 港に対してガラス器の輸出が見える他に（六、七、三十九節）インドの Barygaza 及び Muziris の輸入品として〝未精製のガラス石（ὕελος ἀργή）〟が記されているからである（四九、五十六節）」と記している。ガラスの起源及び発達を詳述したものに、古く Anton Kisa; Das Glas im Altertume, in 3 Teilen, Leipzig, 1908 の大冊と Gustavus A. Eisen; Glass, its Origin, History, Chronology, Technic and Classification to the Sixteenth Century, 2 vols, New York, 1927 が双璧であろう。輓近一種のガラスブームで多くの研究書と類す

る書冊が出現したが、その過半はこれらの抜粋に過ぎない。管見によると各務鑛三氏「硝子の生長」（昭和十八年三月七丈書院刊）が平易にして良心的な佳著として薦めたいと思う。かつてわたくしは昭和五十三年の砌、当時在職していた東京國立博物館東洋館地下の展示場において、約二万点に及ぶ古代ガラスを「東洋古代ガラス展」と銘打って陳列公開したことがあった。その成果を研究図録「東洋古代ガラス―東西交渉史の視点から―」として刊行したが、エジプトのファイアンスからフェニキア、ローマングラスの東方伝播を遺品を通して考察を施したものである。村川先生の指摘された最も歴史の遡るエジプトガラスは第十八王朝の遺物が確かめられ、これに関しては Elizabeth Riefstahl ; Ancient Egyptian Glass and Glazes, the Brooklyn Museum, の序説に触れられているし、インドのガラスについても Dr. M. G. Dekshit ; History of Indian Glass, University of Bombay, 1969 に「インドにおいて金石併用期の紀元前千年に知られていたことは最早疑いないだろう」（前掲書二頁）と指摘されている。

琉璃が aquamarine の硬質青色の属性を経典に用いてきたことは、既に見て来た通りであるが、琉璃をローマン・オリエント地方で製産されたガラス器と考え、魏略の西戎伝大秦國の物産に挙げられた赤色、白色、黒色、緑色、黄色、青色、紺邑、緑色。紅色、紫色の十種の琉璃は、今日遺物として寓目できるガラス器に、コアグラス、ミルフォリグラスにそれぞれ十種の色彩をもっているのが分る。そしてその過半は飲食器としての酒杯や盤、水瓶の類である。葡萄酒が東方に伝播して流布したことは、拙稿「ディオニソス信仰・葡萄酒の東方伝播」（「三笠宮殿下古稀記念　オリエント学論集」昭和六十年、日本オリエント学会編、所収）に詳述して、ガラス器と葡萄酒と供なって、吾が國の正倉院寶物中の白瑠璃碗や、白琉璃瓶にその証據を見るとした。エリュトゥラー海案内記にもイタリア産葡萄酒が東方への重な輸出品として挙げていたが、それに供う飲食器としてのガラス杯、水瓶があったこと当然であろう。船舶による輸山の際に樽に塡されたのか、酒瓶として陶製甕が用いられたのか、亦今日の

葡萄酒瓶にみる様な酒ビンだったのか、その詳細は不明であるのが実状のようだ。最近シリア沖やトルコ沿岸での沈没船の発見と、水中考古学技術の発達による遺物採集引き上げで、夥しい数のアンフォラ型の瓶甕が船舶に積載されていることが分った。その内容物の分析からオリーブ油なのか葡萄酒なのかを知り度い所だが、今の所は何れとも不明のままである。しかし葡萄酒の嗜飲の流行はそのままガラス器の利用につながる。琉璃光の浄土とする薬師如来の場所のイマージュは決して青色世界一色だったのだろうか。薬師十二大願のなかに「我が身瑠璃の如く、内外清浄にして瑕垢なく。光明日月に過ぎ」た光明を発すると記してあるが。単に aquamarine の青色のみとは考えられない。

そこで薬香料の産地をインド洋、ベンガル湾から東方のインド群島、その中には当然モルッカ群島も含まれようが、ローマン・オリエントの商賈たちの舶載した葡萄酒の代りに、夥しい薬香料を換えて輸入した筈である。わたくしは更に推測する。葡萄酒を塡めた酒瓶も過半ガラス器だったのではないか。そしてインド東南アジアではガラス器が高価に売却されて、一挙両得の商貿易で利潤を得ていたに違いない。しかし管一本による吹きガラス技術の東方伝播によるガラス器の価値は下落したと考えて誤りあるまい。とすると酒瓶ガラスに薬香料を積め込んで舶載したろうことが予想されよう。此処に東方琉璃光薬師浄土のイマージュが結晶する。当時東西文化の交流の活発な活動は異人種の往来が頻繁だったろう。洋の東西古今を問わず疫病、伝染病はその際に激増群発する。就中癩や疫は最も昌獗を極めたに相違ない。中央アジアのシルクロードのオアシス都市も、各地の港湾都市も多くの犠牲と被害に見舞われたろう。そうした雰囲気の中で知恵ある佛教徒らが、薬香料の効果を熟知していて、尚ガラス瓶に塡められたその薬草からイマージュしたのが、東方瑠璃光薬師浄土だったと考えてみるのも穴勝牽引附会とは云えなかろう。

文化史の上から見た経典成立の一面を紹介してみたのがこの論考である。